

山口光太郎君を偲んで  
――雪月花の時 最も君を憶ふ――

十回生 石橋正敏

かつて 山口光太郎という男がいた

一七回生で 長崎東高在京同窓会の名事務局長であり 不世出の名幹事長だった  
時代を先取りして まるで物に憑かれたように インターネット時代の到来を語りながら作り上げた長崎東高在京同窓会のホームページは 彼の残した最高の遺産である

彼を 司馬遼太郎氏風に表現すれば 「大きな魂というものは その内側に少年を飼っているかいないかということだと思おう 星空の下にいるというだけで心が水色に溶けていくような衝動 気高さを持った人物に出会う時に その気高さを寶石のように結晶させて自分の心にピンをさすように埋めてみたいという気持 珍妙な人物に会った時 すぐさま童話世界に組み込むような無制限な自由 物事に無心に凝る心 少年とはそうしたもの」であり 「人間の持つえぐさを糖化し 自己の中で社会人として醸造し それ以上に 極めて芳醇なエキス分の香る蒸留酒にまで昇華しえた男」だった

彼が最初に 在京同窓会の表面に姿を現したのは 彼ら一七回生が企画した一九八七年の第十五回在京同窓会で できたばかりの全日空ホテルを会場に選び たしか「いま話題のホテルで同窓会を」というキャッチフレーズで空前の参加者数を誇ったことを 私は記憶している  
『東風』の編集に最初から携わるようになり 一九九六年からは名幹事長として敏腕を振るい 優れたアイデアマンとして各種行事にも活躍した

彼は同窓の井上早苗さんを良き協力者にして一九九六年にインターネット研究会を立ち上げ メンバーをぐいぐい引きずっていきながら 翌年六月お台場のフジテレビ二階『フォーラム』で開催された第二五回同窓会において インターネットの公開を企画し 同窓会総会は開会前から異様な熱気に包まれてスタートした  
そうした長い準備と多数の方々の協力を見事に統率して ついに『長崎東高在京同窓会』のホームページ開設にこぎつけた彼の一念は その構成と内容の格調の高さにおいて いつまでも称えられていい

山口光太郎は 二〇〇〇年三月二十七日未明 忽然として逝った

彼は 銀座一丁目に広告デザインのおフィスを構え いつもマツキントツシユのパソコンに向き合っていた 私は銀座七丁目にワインバーを開いていたので 時おり電話で「先輩うまい中華の店があるんですが 昼飯でもどうですか」と誘われ 春風ただようような気持ちのいいひと時を過ごしていた

また 私の店でしたたかに飲んだ後 気が向けば近くの戦前から残っていたのかと思うような床の傾いたバーに繰り出し 地唄舞の名手だったそのママと 深夜までカラオケに興じたり あるいは突然「赤坂のTBSの近くの公園に 昔小学校の校長先生だったひとのやつている屋台のおでんやがあります 行きませんか」と誘われ行くと 別にそのことについて話をするでもなくそこらの石に腰掛けて 笑顔で酒を飲むばかりだった

またある時は 「NHK出版から梁石日氏の『夜を賭けて』が出るんで

すが その作品中長崎の銅座のバーが舞台のところの長崎弁を 正確に校正できる人をNHKが探しています 先輩頼みます」という電話で 一晩それをやり その後朝まで梁石日氏と飲み明かしたこともあった

幾たびかは 影のように従う少し病弱な優しい奥さんと共に 信州の山の中の我が家を訪ねきて 雪に感動し 月光に戯れ 花を愛でながら楽しい酒席をもった 季節がいつであれ その席は春風駘蕩としていた

彼が逝つてすでに八年の歳月が過ぎた  
あの優しい奥さんもすでに亡く ご子息も不慮の死を遂げられたと仄聞する 善人すぎた一家の早世を悼む言葉を なんと表現できるだろう

七回忌の前 寄稿者も少なくなり少し寂れてきたような在京同窓会のホームページを眺めながら 山口光太郎の軌跡をここに書き残しておかねばとの想いが痛切ににじみ出てきた それから二年 自分の病に忙殺されながら 昨春からペンを執り やつとの思いで彼への鎮魂の思いを記した次第である

光安 西川 下田 堀という素晴らしい同窓会長のもとで和氣藹々と盛大に総会を重ねてきた中であつて ひとときわ 閃光のように輝きながら貫いている君 山口光太郎君を 私達は永久に忘れない

二〇〇八年三月二十六日



在りし日の山口光太郎氏